



使う部位に合わせて、武州染めの生地を裁断する

今回からは日本剣道具製作所における剣道具の製造工程を、部位ごとに細かく紹介していく。まずは面の製造工程のうち、面布団のつくり方から見ていくことにする。工場の入口近くでは生地を裁断していた。面布団、小手布団、垂れなど、部位に応じた寸法にハサミで裁断していく。日本剣道具製作所では「武州染め」と呼ばれる埼玉でつくられた生地を使用している。「武州染め」にもいくつかの業者があり、前回まで述べたように小売店からのリクエストに応じて、それが無い場合は鹿革などのマッチングを考えて最も適したものを選んでいる。いずれ連載の中で「武州染め」がつけられる工程も紹介したい。

面布団について、多くの読者がまず気に

左は面布団に使う左は芯材を揃える作業、右はその生地を揃える作業をしている



それぞれの面の仕様に依りて揃えた芯材を糸で固定する

川辺さんはこう話す。「今流行しているのはピッチ刺しですが、ここではピッチ刺しでも普通刺しでも、どういう刺し方でもできます。それも各小売店さんの仕様に合わせます。一般にピッチ刺しの方が柔らかいというイメージがあると思います。刺しの仕方でも柔らかさが違ってきます。」

刺しだけでなく、芯材も、作り方も重要

なるのは「刺し」だろう。近年は、刺しの間隔を広めにとって手刺しに近い風合に仕上げた「ピッチ刺し」が人気を博している。

日本でつくる 剣道具

—— 剣道具の製造工程、すべて見せます

第3回 面布団の柔らかさは刺しだけでは決まらない

撮影＝窪田正仁

案内人
川辺尚彦

(株)全日本武道具、
(株)日本剣道具製作所代表取締役



てくるのは確かですが、中の芯材にも大きく左右されます。ピッチ刺しでもあまりよくない芯材を使ったものは、防具として耐久性がなくなります。」

その芯材として主に使われるのがフェルト。工場の中には何十種類ものフェルトがストックされている。この組み合わせによって柔らかさが違ってくるので、天の部分を柔らかくするなど、やはり小売店にの仕様によって組み合わせを変えるという。

「中に入れるフェルトも全部日本製で、うちだけの専属のフェルト屋さんがあります。日本製の生地で、日本製の芯材を使って、それでピッチ刺しをするから、いい風合で、柔らかく、耐久性もある防具ができるんです。海外でつくるものなど、あまり材料を吟味していないところは、ただ柔らかいだけで、



ここからは面布団に刺しを施す前段階までの作業を紹介。まず揃えた生地の長さを測りながら、縫うためのラインを引く。時おり計算機を使って寸法を確認したりもしていた



両端をミシンで縫っていく



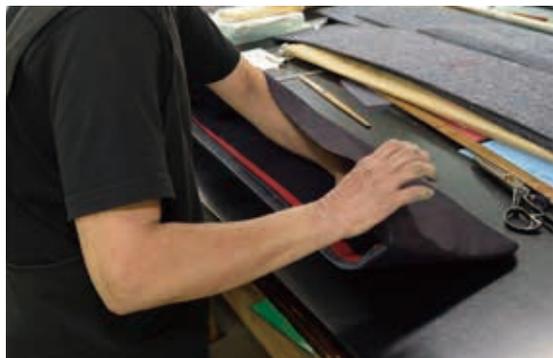
袋状に縫った生地の中に芯材を入れる



芯材が収まった状態



ここでもう一枚の生地を、袋の中に入るサイズに切り、



芯材の上はこの生地を入れる。本文中にあるように、擦れたときに芯材が露出しないための工夫である



生地が開いている側を端から縫い付けていく



端から途中まで縫った状態。右の縫い付けられている部分はあらかじめ仮縫いしたところ



面布団の形が応完成。このあとで刺しを施す(以下次号)

クッション性も何も考えていないものも売られているのが現状です」(川辺さん)

写真では面布団の生地に芯材を入れて縫い合わせるまでの工程を紹介している。とくに気がついたのは、いったん芯材を入れたあとで、それに合わせて生地を裁断し、その上に差し込んでいたことだった。

「これの中に一枚入れることによって、擦れてしまっても中の芯材が見えないように裏当てしているわけです。海外でつくるものでは、なかなかそこまではないと思います」(川辺さん)

そんな細部にこそ日本製ならではの良さがあり、できあがった製品としては大きな違いになるのかもしれない。